

# すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2019.12  
213号

■特集／三重の登録有形文化財（前編）

●いま、グループネット／Arts Planet Plan from IGA ●みえを歩こう／松阪市射和町





# 三重の登録有形文化財（前編）

県内には、歴史的・景観的に貴重な建造物が数多く存在しますが、近年ではその建造物を単に保護するだけでなく、幅広く活用しながら継承しようという機運が高まっています。国（文化庁）が制定する

「登録有形文化財」もこうした考えから始まりました。

今回は、県内の「登録有形文化財」の中から、6か所をご紹介します。

\*各「登録有形文化財」の開館日時・受け入れ方法・料金などはそれぞれに異なり、変更になる場合もありますので、必ず事前にご確認ください。

取材・文：中村真由美・中村元美

撮影：……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

## 地域の独自性を守り、活用することで後世に伝える



緑青色のプレート

を掲げた「登録有形文化財」は、国が保存と活用を特に必要とするものとして文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

平成8（1996）年に、制度が導入されました。

登録制度の対象となるのは、建築後50年を経過した建造物。住宅・事務所・社寺などはもちろん、橋・水門・トンネル・煙突など幅広く数多くの文化財を対象としています。広く親しまれていたり、そこで見られない珍しいものなどが、その資格を持っています。

保護のため許可などの強い規制を受

ける「指定文化財」は、その活用方法がもっぱら公開であるのに対し、「登録有形文化財」は届出と指導・助言・勧告を基本とするゆるやかな制限のため、カフェやレストランなどの商業施設や宿泊施設、地域住民の活動の場など、いろいろな用途に活用することができます。

平成29（2017）年、「みえ登録有形文化財建造物友の会（会員数58名）（愛称「さんとうぶん」）が設立されました。

歴史的建造物の所有者、また建築士や学識経験者が一緒になって活動を行う組織です。こうした動きは、全国の都道府県で8番目。その価値を見出して保存し、まちづくりや「コミュニティの拠点、観光資源」として活用していくという、いち早く立ち上がりました。

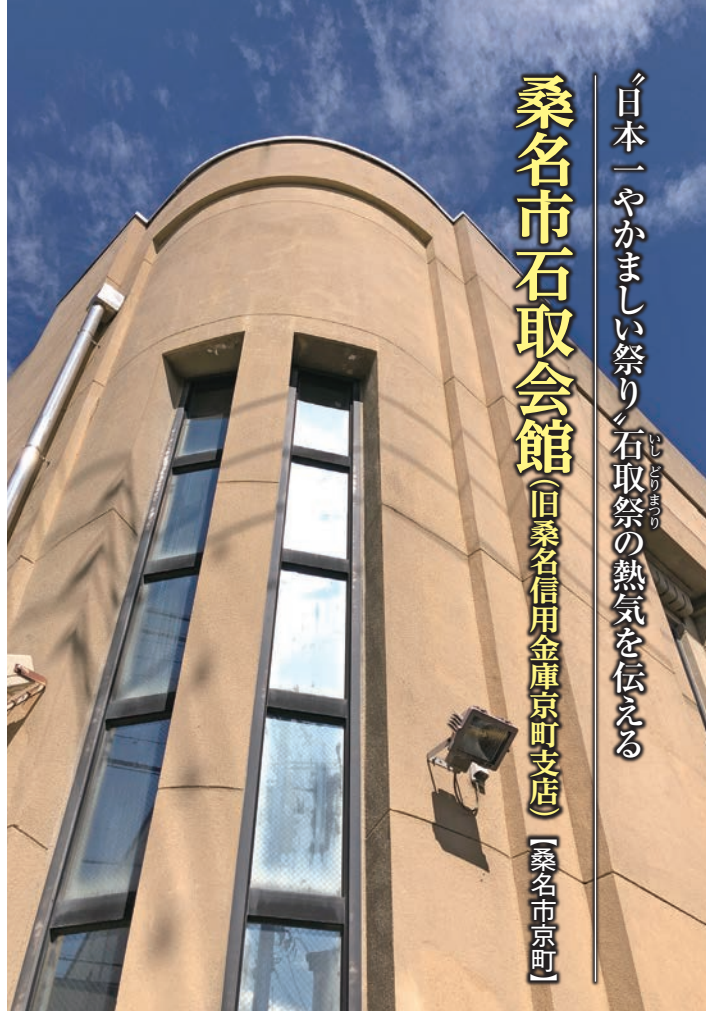
「阪神・淡路大震災以降、歴史ある建造物を見直す活動が盛んになりました。資産として、また文化として活かし、ゆるやかに守っていくという発想です」と、「さんとうぶん」の事務局長であり、三重県文化財保護指導委員の岩見勝田さん。歴史的建造物の保全活用に関わる専門家であるヘリテージマネージャーの育成にも携わっています。現在、ヘリテージマネージャーは県内に116人ほどいますが、地域の人々と連携しながら地域文化活性化の一翼を担う人材として活躍しています。

「登録有形文化財」のトレーディングカードも作成しました。カードを集めることで、文化財に関心を持つ人も増え、地域で親しまれてきた古い建物こそ見直すという気運が高まっています。



日本一やかましい祭り「石取祭」の熱気を伝える

## 桑名市石取会館(旧桑名信用金庫京町支店)【桑名市京町】



丸く縁取られた角部分と縦長の窓が印象的な「桑名市石取会館」外観

く縁取られているため、温かみを感じられます。一見するとシンプルな外観ですが、窓の上部などに装飾が施され、細部にまで神経が行き届いていることが伝わります。

東海道の宿場町であると同時に、城下町・港町として発展した桑名旧市街地には、「六華苑」「九華公園」「七里の渡し跡」など、多彩な歴史・文化施設が存在し、充実した散策が可能です。この中で、少し趣を異にするのが「桑名市石取会館」でしょう。2階建て鉄筋コンクリート造りの建物ですが、角部分が丸

同館が竣工したのは、大正14(1925)年。当初の役割は、四日市銀行の桑

名支店でしたが、その後、桑名信用金

庫の本店を経て京町支店として使用されました。平成3(1991)年に桑名市に寄贈されると、翌年に「桑名市石取会館」(入館料無料)として開館。以来、「石取祭」の情報発信拠点としての役割を担っています。

館内に入ると、まず目に飛び込んできたのは、天井まで届きそうな高さの祭車です。「石取祭」は、各町から曳き出された約40台の祭車が練り歩く祭りですが、町ごとに趣向を凝らした祭車が勢揃いするのは、壮観な眺めでしょう。続いて祭車の後方に視線を移すと、大太鼓と鉦が吊るしてあるのに気付きます。太鼓の大きさは直径約80センチメートル、鉦の直径は約50センチメートル程度です。これらが「石取祭」が日本一やかましい祭りと呼ばれる所以。太鼓や鉦を打ち鳴らすお囃子の音がゴングン、チキチキン、ゴンチキチン…と街中に鳴り響くのです。

「桑名の子どもたちは、お母さんのお腹の中にいる間から、お囃子の音を聞

の祭りへと発展した「石取祭」ですが、

明治7(1874)年には県の命令で禁止になったこともありましたが、桑名の人々は祭典規約などを作成して、同14(1881)年に復興を成し遂げたのです。また、戦災で祭車が焼失するという試練などもありましたが、その度に力を合わせて乗り越えてきたのです。こうした人々の熱い想いが届き、平成

19(2007)年に「桑名石取祭の祭車行事」として国の重要無形民俗文化財に指定され、同28(2016)年には、「山・鉦・屋台行事」の一つとして、ユネスコ無形

文化遺産の代表一覧に記載されました。桑名の夏を彩る「石取祭」は、毎年8月の第1日曜日と前日の土曜日に行われますが、祭り以外の日であっても「桑名市石取会館」を訪ねれば、桑名の町衆の心意気と熱気が伝わってくるでしょう。

### お問い合わせ

桑名市産業振興部観光文化課  
TEL 0594-24-11361  
「桑名市石取会館」  
(月曜・木曜日休館) ※7月から8月の  
祭礼終了までは、木曜日開館  
TEL 0594-24-6085



江戸時代末期に製造されたと伝わる  
漆仕上げの祭車



鉦のたたき方を実演する久保田 恵友さん



「石取祭」※



子どもたちの笑顔輝く木造校舎

## 亀山市立白川小学校 南棟・北棟

【亀山市白木町】



南棟の正面中央の玄関ポーチ

もう一つの特徴は、昭和29（1954）年に建てられた校舎が木造だということ。北棟と南棟の2棟が平行して建っていますが、いずれも木造平屋建てで、平成21（2009）年に国の登録有形文化財になりました。

普段は非公開の校舎を、校長の三谷 武治（たけじ）さんのご厚意で案内してもらうと、どこからか木の香りが漂い、懐かしさも加わって心が和むのを感じました。また、教室の窓が2

明治32（1899）年の創立以来、120年の歴史を有する亀山市立白川小学校には、いくつかの特色があります。その一つは、市内で唯一「小規模特認校」に指定されていること。これは、正規の学校区外であっても、一定の条件を満たせば、特別に同校への入学・転学を認めるといふもの。平成31（2019）年4月現在、14人の児童が利用しています。

が漂い、懐かしさも加わって心が和むのを感じました。また、教室の窓が2段構えになっていて、想像以上に天井が高いことに気が付きます。これは、風通しをよくすることと、採光のためだと教わります。

そして、最大の特徴は、地域住民が学校と子どもたちを大切にしていること。運動会や餅つきなどの学校行事なども合同で行うことが多く、たとえば

運動会では、保護者や卒業生・老人会なども参加するのです。そこには、学校は地域の「核」であり、子どもたちは「宝」だという共通の想いがあることを伺いました。

「こんにちは」「セミの抜け殻見つけたよ!」。子どもたちの作品などが展示された廊下を見学していると、次々と声をかけてくれます。その元氣な姿に思わず頬が緩みます。木の温もりと、地域住民の愛情に包まれた子どもたちの笑顔は、輝いて見えました。



木の温もりが伝わる廊下

### お問い合わせ

亀山市立白川小学校

TEL 0595-82-3007

名物料理を伊雑宮門前の御師邸で堪能

## 中六

【志摩市磯部町】



入口の横に掛かる看板が老舗の實録

それ以前の詳しいことは定かではありません」と中六のご主人、中元弘さん。屋号は、参拝者のお世話をする御師の「中六太夫」が由来となっています。御師は祈禱（きとう）を行う神職で、明治4（1871）年に制度が廃止されるまで活躍しました。

建物は瓦屋根の存在感が引き立つ入母屋造。角地に建つため、道路側の2面ともに起り破風（はふ）を持つ妻入りが独特の雰囲気、参拝でにぎわった往時の風格を残しています。20年に一度、社を建て替える伊雑宮の式年遷宮（せんこう）に合わせて、昭和4（1929）年まで中

志摩市で初めての登録有形文化財が、磯部町にあるうなぎ処の「中六」です。平成23（2011）年に登録されました。伊勢神宮内宮の別宮である伊雑宮（いざわのみや）の前に店を構え、昭和50年ごろまでは旅館を営んでいました。「江戸時代には宿として存在していて、先祖の墓石には1700年代のものがあるのですが、

合わせて、昭和4（1929）年まで中六も店舗の建て替えを行っていました。広々とした玄関は旅館としての名残。1階は厨房や控室として使われ、2階が客間です。中廊下を介して8畳の和室が続き、落着きのある空間となっています。高欄（こうらん）を取り付けた窓は大きく、開放的な外観は当初の面影のままです。



宿の名残を感じる玄関



襖を取り外して広々と利用

伊雑（いざわ）ノ浦に流れ込む川の上流でうなぎが獲れたことや、養鰻（ようまんと）場があったことから、鰻料理が磯部町の名物。中六では代々受け継がれる秘伝のタレで、うなぎを焼き上げています。

木造の建物を使っていくコツを尋ねると「毎日窓を開け閉めするので風通しはよいでしょうが、普段通りです。今のところ大きな修理はないですね」と中さん。日々、参拝者や地元客を迎え入れることが、維持管理にも役立っているようです。

### お問い合わせ

「中六」

TEL 0599-55-0028



賢島のシンボルが再び息を吹き返す

## 旧猪子家住宅

主屋・土蔵・門柱

【志摩市阿児町】



平成29(2017)年、活用プロジェクトが評価され、ウッドデザイン賞を受賞

明治13(1880)年に四国で生まれ、保険会社各地の支店長などの要職を歴任した猪子彌平氏が、退職後の住み家

をめざして手を入れてきたので、ほぼ当時の姿です」と文化財登録にも関わった東原建築工房の東原達也さん。外壁

として選んだのが、賢島の地です。昭和9(1934)年に英虞湾を見下ろす高台の南斜面に私邸が建築され、時を経て平成25(2013)年、志摩市在住の竹内和彦さん、千鶴さん夫妻の所有となりました。

「何度が修理されていきましたが、設計図はないんです。玄関の屋根は倒木で壊れ、床もシロアリなどで痛んでいたの、古い写真を元にサッシも木製建具に戻しました。ほかも復元

は防虫、防腐効果もある日本古来の渋墨塗で、黒壁を再現。システムキッチンに改装されていた台所は、それ以前の三和土間を家族や友人とつくり出し、建物の価値や使い勝手のよさを高めています。「外観の大きな変更や移築の場合には文化庁への届け出が必要ですが、修繕や改築の自由度が高く、何より幅広い活用を考えられるのが、登録有形文化財の特徴です」と、東原さん。主屋は木造平屋建て。張り出した玄関と台所部分それぞれに、入母屋の屋根が架かり、変化のある外観です。内部は和洋の意匠を併せ持ち、当時の建築技術を垣間見ることが出来ます。和室は格式ある床の間、付書院、欄間には松竹梅などの彫刻が施され、洋間は漆喰塗壁、見上げれば漆塗り仕上げの格天井の洒落た空間で、猪子氏は書斎として使っていたようです。

賢島は戦後に伊勢志摩国立公園となり、保養地としての利用が進み別荘やホテルが建設されましたが、和洋折衷

の建物の先駆けとして、猪子家は地域の規範となったことでしょう。

猪子家の文化財は住居だけではありません。主屋の西側には、2階建てで寄棟屋根の土蔵が建ち、敷地への入り口に建つ門柱は、主柱の上に笠石を載せ、側面を瘤出し仕上げとしたもの。派手さはないものの、街路の景観に重厚感を持たせています。

2800坪の敷地は、起伏がある緑豊かな自然林。散策する小径も竹内さん夫婦が整備してきました。「ツバキや

栗の木、季節毎に花や実を付ける樹木に昆虫や鳥が集まっています。海もすぐ近くで、木が若かったころは当然英虞湾が見えたんでしょう」とその景観にも引きつけられた千鶴さんは、「志摩クリエーターズオフィス」の代表を務め、自身もアーティスト。この一帯をアートの交流の場にしていこうと、さまざまなアイデアを練ります。「猪子家住宅も一つの芸術で、建築的な作品。周辺の環境とも一体化した、大人の秘密基地です」と夢が膨らみます。楽しい企画

を考えると同時に、維持していくために利益を生む手段も模索しています。文化財は保存するだけでなく、活用されることが重要。活用は公開によりその価値を共有するだけでなく、建造物を使い続けることが大切です。その効果としてまちづくりやコミュニティの拠点としての地域貢献が期待されています。

### お問い合わせ

竹内千鶴さん

TEL 090-1824-2724



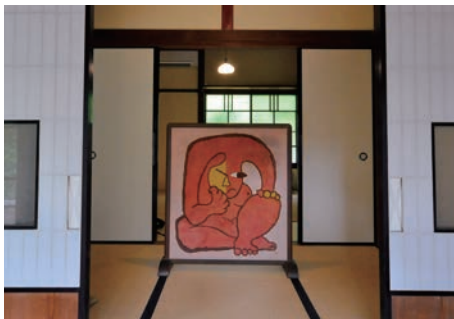
付書院の細工にも品格が漂う



洋間に置かれた机は当時のもの



さりげなく、どっしりと構える門柱



室内装飾にアーティスト作品を活かす



ネオン管の看板と唐破風屋根が出迎える

# 昭和レトロ銭湯 一乃湯

本館・門

【伊賀市上野西日南町】



古き良き時代へタイムスリップ

すくつと端正な石の門柱に、屋号を掲げたインパクトのあるネオン管も創業時のもの。城下町の一角にある「昭和レトロ銭湯 一乃湯」は、近所の常連のみならず、遠方からもファンや観光客が訪れるほど人気の銭湯。伊賀上野の2軒ある銭湯の一つですが、かつてこの町には20軒ほどが営業していたようです。建物は大正15(1926)年の建築で、当時は「草津湯」という屋号でした。一乃湯3代目、中森秀治さんの祖父が、昭和25(1950)年に購入し、改装しながら現在に至っています。

本館は曲線状の屋根様式である唐破風とすかし飾りの設えで、気分を盛り立ててくれます。

館内は懐かしい光景そのもの。昭和歌謡のBGMが流れ、更衣室にはマッサージチェアや瑠璃看板、ブリキのおもちゃに昭和スターの映画ポスターが飾られていて、見どころ満載。入浴するだけでなく、タイムスリップした昭和の雰囲気味わえます。またテレビは取



下駄箱には木札の鍵が付く



折上格天井と透かし彫りの細工



レトロな昭和グッズが並ぶ



風呂用品と和の小物が並ぶ



腰掛ける段差があるのは関西風



イベントも行う「イチノユプラス」

土地の雰囲気が一番触れ合えるのは、銭湯ではないでしょうか。旅気分も味わえます。ほかの地域に出掛けたときに銭湯を見つけたら、ぜひ入ってみてください」と中森さん。

銭湯は、戦後から昭和40年代にかけて繁盛し、最盛期には全国に2万軒近くあったそうです。後継者不足や経営難で今では10分の1ほどに減少していますが、独特の生活文化を築いてきました。昔ながらの趣のある一乃湯は、今も昔もコミュニケーションの拠点。まちなかの社交の場として存在しています。

そんな思いは銭湯の中だけにとどまらず、隣接する建物を交流の場になればと「イチノユプラス」としてオープンさせました。また銭湯前の通りを「コトコトこみち」と名付け、移住者や店舗の呼び込みにもつなげ、新たなにぎわいを見せています。

## お問い合わせ

「昭和レトロ銭湯 一乃湯」

TEL 0595-21-1126

り外し、館内は禁煙、禁止事項の貼り紙は極力抑えられ、うちは竹細工のもの、蛍光灯もオレンジ色にこだわるという空間づくりを徹底しています。

清潔感あふれる館内は、至るところに細かな気配りが感じられ、ショップカードやイベントチラシがまるでギャラリーのよう。中森さんがセレクトした書籍も並び、湯上りに読書にふける人もいます。そして番台前は風呂敷や下駄、アルマイトの風呂桶など銭湯グッズの売店コーナー。「手ぶらセット」には一回で使い切れる量に調整したオーガニックシャンプーと石鹸が付いています。

浴場ドアにアーチ状の色ガラスがはめこまれ、和洋の建築デザインがレトロなムードを醸し出しています。壁にはお馴染みの富士山の絵、中央に浴槽があり、その周りに腰掛けられるよう段が設けてありますが、ここに座って掛け湯をすれば、見ず知らずの客同士にも会話が生まれるようです。

湯加減は地元客の好みに合わせて温度設定をしています。決まった時間帯に銭湯に出掛け、同じ面々といつもの会話をすることが、常連の楽しみ。お風呂は暮らしの一部ですが、一日の中でホッとする時間を楽しんでほしい。



# 木屋正酒造

店舗兼主屋

【名張市本町】



200年になる酒造を6代で受け継ぐ

奈良から伊勢へと向かう初瀬街道沿いで、大きな杉玉が目印となっている「木屋正酒造」。漆喰塗りのつし部分に虫籠窓を穿つ、老舗の造り酒屋らしい風格で、古い町家が建つ本町筋の象徴的な存在となっています。杉玉の看板屋根

の梁に記された墨書きから、店舗兼主屋は、明治22（1889）年の建物であることがわかっています。瓦などのメンテナンスを繰り返し、使われてきました。木屋正酒造5代目の大西 武夫さんは、「伊賀盆地は朝夕の寒暖差が大きく、

夏は暑く冬は冷える気候とあって、酒造りに最適な環境です。近くを流れる名張川の伏流水で、酒を仕込んでいます」と、代々続く蔵元の歴史を教えてくださいました。木屋正酒造は文政元（1818）年の創業ですが、江戸時代に栄えた造り酒屋、木平家の「ほていや」を、材木商であった大西 庄八が譲り受け、屋号を「木屋正」と改めました。店舗兼主屋の軒瓦には、大西家の家紋である「違い鷹の羽根一つ引」が施されていますが、倉庫や酒蔵には木平家の「三つ桜」の家紋がそのまま残され、2つの蔵元の変遷が読み取れます。

広い間口から入ると、飴色に輝く柱や壁。そして大きな框が座敷へとつながり、床の間や欄間に施された細工からは、客人を迎えるための高貴な落着いた雰囲気が出てきます。飾られている「群鶴図屏風」から、建築当時の華やかさも想像できます。客間から見える中庭は、名張藤堂家邸の庭を模したものといわれ、池の横に建つ灯籠

が目を引きます。

創業時から造り続ける銘柄の「高砂」で、伊賀地方を中心に商いをしてきた木屋正酒造ですが、現在は蔵元であり杜氏の6代目、大西 唯克さんが平成17（2005）年に「而今」を立ち上げ、幅広く展開。平成28（2016）年に開催された伊勢志摩サミットでは、三重の地酒として首脳陣の食事や乾杯に使われ、全国的にも注目を浴びています。「酒造りの一切を取り仕切るのが杜氏。日本酒は複雑な工程で造られるため、かつては技術者である杜氏が契約した

蔵に住み、1シーズンの酒造りを請け負っていました。今や次世代を背負う若手が先端技術と伝統をコラボし、トレンドイなお酒を創造しています」と武夫さん。日本各地の歴史の古い酒蔵が減少しつつある今、時代に合わせ、品質重視の酒造りをめざしています。酒造りに欠かせない土蔵は築200年となり、当時の姿を残しています。「名張・まちづくりの会」で文化財登録に関わった岩見 勝由さんは「蔵は酒造りに集中するため、登録物件からははずされていますが、酒造業や歴史を知る

上でも貴重な存在です」とその価値を語ります。岩見さんは初瀬街道に多く残されている町屋の調査に入り、これまでに12件24棟の有形文化財の登録に尽力してきました。点として存在する文化財を、線でつないで面にしていくのが、今後の課題だといいます。若手杜氏の意気込みがにじみ出る酒蔵には、酒造業のこれからの期待が満ちあふれていました。

## お問い合わせ

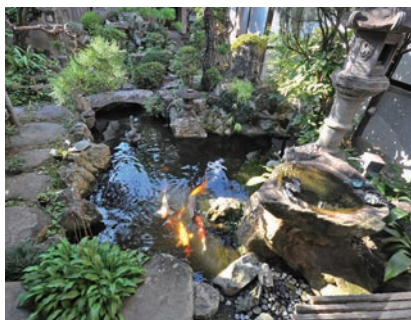
「木屋正酒造」  
TEL 0595-6310061



軒瓦に「違い鷹の羽根一つ引」



普段から応接間として使われる



客間から眺める池に鯉が泳ぐ



土蔵の一角を試飲室に改装



ものづくり、まちづくり、ひとづくりをテーマに、芸術文化の普及と振興・発展をめざして伊賀を中心に活動している芸術系NPO法人です。さまざまな人々が、創造的な芸術活動に楽しみながら参加することで、人や地域が元気になるような取り組みを伊賀から発信しています。



手作り感満載のアトリエ

お問い合わせ

NPO法人  
Arts Planet Plan from IGA  
事務局  
伊賀市伊勢路字青山1381-77  
TEL (186-)0595-53-1077\*  
\*非通知不可です  
e-mail  
contact@appfi.org

三重県内で活躍するグループを紹介する「いま、グループネット」。今回は、伊賀を中心にアートの公開実技講習会や展覧会、また芸術祭など、広く活躍するArts Planet Plan from IGAの活動や地域への取り組みについてグループの代表理事である森田耕太郎さんにお話を伺いました。

——Arts Planet Plan from IGAの誕生について教えてください。

森田：もともと私は大阪の高校で20年間美術教諭をしていました。退職後も制作活動ができるアトリエを捜していたところ、伊賀の知人から声がかかり、この場所が見つかりました。そして大

阪、奈良、滋賀、三重の仲間を誘い、ともに平成14(2002)年5月にNPO法人として立ち上げました。伊賀は自然が豊富で大阪からそこそ遠くないところ。私はもとから興味を持っていたアーティスト・イン・レジデンス(滞在型公開制作)について作家が地域に滞在して作品制作の初めから終わりまでを公開することを開催することが、ここならそれとできると背中を押されました。



森田さん(左)と事務局員の皆さん※

——ものづくりである実技講習会で

はどのようなことをしていっているのですか？  
森田：初心者でもわかりやすく本格的なものづくりが楽しめるよう、年4回ペースで各分野の専門家を講師に招き、一般からも参加者を募って開催しています。その内容は、馴染みのある染色はじめ、これまでに「表装体験」や「本格ケイム技法によるステンドグラス」にぎり墨体験など、かなり専門的なものづくりにも挑戦しています。最近では、地元で採れたイガグリやビワの葉などを使った草木染めと地元の料理上手なお母さん手作りの野菜たっぷりランチと伊賀米を味わってもらえる共働企画も提案しました。

——まちづくり、ひとづくりの点ではどうでしょうか？

森田：…まちづくり、ひとづくりとしては平成14(2002)年度より「風と土のふれあい芸術祭 in 伊賀」の事務局として運営を行っています。これは伊賀だけでなく、広く大阪京都、奈良、兵庫、愛知からも多くの作家が参加する展覧会とアーティスト・イン・レジデンスを中心に、ワークショップやアートフェア、フリーマーケット、音楽ライブなどを行う盛りだくさんの芸術祭です。

三重県内外の多くの作家が交流しながら刺激し合えるチャンスを提供できるのは嬉しいことです。

またボランティアなどをおして担い手の育成なども行っています。

交流活動に関しては研修旅行があります。これは主に県外の工房見学や実習、そしてその土地の温泉や郷土料理を堪能しながら参加者同士はもちろんのこと、訪れた先の作家や職人との交流も深められます。最近では「熱海・小田原 温泉とアートの旅」を開催しました。

——ありがとうございます。森田さんに今後の夢や展望をお伺いすると、このような活動は無理に続けるものではなく、誰かやりたい人がいて自然に残っていけばいい、とあくまでも緩やかなスタンスと感じました。その一方で、風はよから、土はもとから外の人と地元の人が交流することで新たな風土が生まれる。人の交流を使命と感じ、それをめざした活動をつづけていきたいという熱い想いも強く伝わってきました。

インタビュー…末永薫



憩いの場でもあるアトリエ2階



実技講習会の様子と作品※

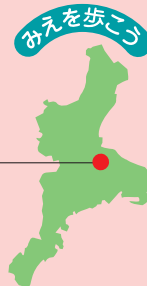


「風と土のふれあい芸術祭 in 伊賀」※



研修旅行(多治見にて)※





豪商の町・射和で大淀三千風句碑巡り

## 松阪市 射和町

江戸時代中期の俳人で現在の三重県出身者と聞くと、まず思い浮かべるのは松尾芭蕉（1644～1694）でしょう。そしてもう一人、忘れてならないのが大淀三千風（1639～1707）です。三千風（本名三井友翰<sup>ゆうかん</sup>）は、江戸店持ちの有力商人を輩出した松阪市射和町の出身。全国を行脚しながら数多くの句を詠んだことから、漂泊の俳人<sup>し</sup>と称されます。

平成29（2017）年「射和地区まちづくり協議会」が中心となり、三千風ゆかりの地6か所に句碑を建立しました。今回は、三千風の句碑を巡りながら、豪商の町・射和の散策を楽しみます。

取材・文：中村真由美

### 射和発展をささえた伊勢白粉<sup>おしひい</sup>

今回の散策は、JR・近鉄「松阪」駅前から三重交通バスに揺られること約20分、バス停「射和」で下車して始まります。本数が少ないため、事前に時刻表を確認しておくといでしょう。なお、車の場合は「射和地区市民センター」駐車場を利用すると便利です。

「では、延命寺から句碑巡りしましょう」と案内されて、西へ進みます。射和小学校を右手に見た後、南へと方向を変えて住宅地を歩くと、突然景色が一変しました。南側は木立の合間から櫛



見事な石垣が続く延命寺周辺



延命寺の山門（県指定重要文化財）



延命寺内に立つ句碑

田川の流れが垣間見え、北側には見事な石垣が続きます。石垣は延命寺と隣接する伊馥寺<sup>いふじ</sup>のもですが、城跡に迷い込んだ気分になりました。三千風の句碑は、延命寺の山門をくぐった先にありました。白い四角柱の表面に「白粉や土朱うばふ雪女」の句が刻まれています。白粉とは伊勢白粉<sup>おしひい</sup>のことで、土朱とは、その原料で射和の朱中山<sup>しゅうなかやま</sup>から産出する赤土だと教わります。伊勢白粉とは、水銀に赤土などを混ぜたものを加熱してできる昇華物<sup>しょうかぶつ</sup>のこと。文字通り高級化粧品として人気を博した後、薬品としても重宝され、

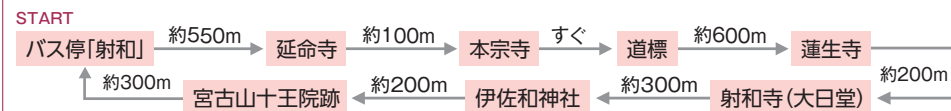
射和発展の元となりました。

最盛期の室町時代には伊勢白粉の製造金元が80以上あり、江戸時代にかけて活況を呈したこの町に三千風が生まれたのは、寛永16（1639）年のこと。商家に生まれたものの、早くから俳諧<sup>はいかい</sup>に興味を持ち、31歳の時に許されて宮城県の松島へと赴きます。その後、仙台に移り住み、多くの門人を抱えていたと伝わります。なお、三千風を名乗るきっかけは、延宝7（1679）年に挑んだ矢数俳諧<sup>やかず</sup>でした。この場合の俳諧とは、五七五の長句と七七の短句を交互に詠みあげ、まとまった句数にする文芸のことですが、矢数俳諧は、これを一昼夜などという時間的制限の中で行います。この時、一人で三千句に挑戦して以降、三千風を号とするようになったのです。なお、俳諧で最初に詠む五七五の句のことを発句<sup>はくく</sup>といい、後に俳句と呼ばれるようになりました。広義の意味では、この発句（俳句）や俳文なども含めて俳諧と総称します。



今回の案内人は、射和「昔を語る会」会長の濱 博之さん。「松阪偉人顕彰団体協議会」理事なども務め、松阪が誇る偉人の情報発信に日々、尽力しています。

■ 行程図 所要時間／約2時間 ※所要時間は、おおよその目安です。





## 射和繁栄の面影

延命寺と句碑

を後にして、三千風の生家・三井家の菩提寺・本宗寺にたたずむ三井家の墓に手を合わせます。その後、さらに東へと歩くと、四



本宗寺

つ角に建つ道標に気付きました。「久ま野ミチ」などの文字が読み取れます。こは、旧熊野街道。かつては多くの巡礼者が往来したことでしょう。さらにこの場所には、射和を代表する豪商・富山家の屋敷がありました。道標の近くに立つ句碑には、三千風が屋敷の脇に



道標



道標の近くに立つ句碑

あった富の松と呼ばれた松の木を題材にして詠んだ「富松は常盤蓬萊の飾かな」の句が記してありました。

道標と句碑に別れを告げて東へ進むと、道の両側に重厚な建物が現れました。いずれも射和商人として名を馳せた国分家と竹川家の屋敷です。なお、竹川家の竹川竹斎(1809～1882)は、幕末から明治時代にかけて政治・経済・文化人として活躍した人物として知られています。

射和繁栄の面影が残る家並みを眺めながら町はずれまで歩くと、蓮生寺に到着しました。同寺には三千風の幼少時の師匠・祐順法師の墓があります。三千風は、仙台に約15年間滞在した後、全国行脚の旅に出ますが、その途中で



蓮生寺門前に立つ句碑

度々、射和に帰郷していました。その際には、必ず同寺にも立ち寄り、師匠の墓前に手を合わせていたといえます。門前には、師匠を偲んで詠んだ句「おもかげの桜モノ云フ 碑銘かな」がたたずんでいました。

「次は大日堂です」との案内で、来た道を少し戻ります。お話の大日堂がある場所は、伊勢国司・北畠氏の祈願所だった射和寺(福願寺・福龍寺)



大日堂



大日堂内に立つ句碑

の跡地。地域の人々は「射和寺さん」と呼び親しみます。三千風も同寺のために句を詠み、その中の一句「はねかへる一葉おとしや獅子楓」を記した句碑が立っていました。なお、堂内の収蔵庫には、南北朝時代の作といわれる木造地藏菩薩坐像(国指定重要文化財)が安置され、毎年春分の日と秋分の日に行われる彼岸会<sup>ひがなえ</sup>で公開されます。

の歴史を有する「射和祇園祭り」(県指定無形民俗文化財)が執り行われ、賑わいます。神社内には三千風が元旦に初詣を終え、朝日を拝んだ際に詠んだ句「元朝や麟鳳遊ぶ神乃松」を記した句碑が立っていました。なお、麟とは麒麟のこと、鳳とは鳳凰のことだと教わりました。



伊佐和神社にお参りした後、西へ進み、三千風の句「柳櫻 鐘木やかざす宮古山」を記した句碑が立つ宮古山十王院跡へ向かい

故郷に眠る  
漂泊の俳人  
大日堂からは北へと進路を変え、伊佐和神社をめざします。少し高台に位置し、普段はひっそりとしています。毎年7月中旬には、300年以上



伊佐和神社境内に立つ句碑



共同墓地にたたずむ三千風の墓

ます。ここには、射和の豪商・竹川家代々の墓石が並び、中央が竹斎の墓だと教わりました。

三千風の句碑巡りは、宮古山十王院跡で最後となり、後は再びバス停「射和」に戻って終了ですが、少し足を延ばして共同墓地を訪ねてもよいでしょう。

実は入口近くに三千風の墓があるのです。北海道を除く諸国をほとんど踏破した三千風でしたが、69年の波乱の生涯を終えたのは、射和に滞在中のことでした。友翰法師と刻まれた墓石を眺めていると、自由奔放に生きながら、

故郷を愛した三千風の想いが伝わってくるようでした。

問 射和地区まちづくり協議会

TEL 0598-291-2002

※印の写真は取材先から提供していただきました



# 三重 の シンボル

熊野市

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木  
スギ



市の花  
ササユリ

■ お問い合わせ ■

熊野市役所 市長公室 TEL 0597-89-4111

\*市・町名の50音順に紹介しています。

\*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 「昭和レトロ銭湯 一乃湯」(伊賀市上野西日南町)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧ください。  
☎ 経営企画部広報ESG課 TEL 059-223-2326(要予約)